

北部九州弥生時代早・前期における再埋葬行為の社会的意味 —— 人骨の二次的移動行為の復元から ——

舟橋 京子

九州大学比較社会文化研究院：〒812-8581 福岡県福岡市西区元岡744
funahashi@scs.kyushu-u.ac.jp

要旨：本論では北部九州を対象に、弥生時代早・前期の人骨出土状況に基づく葬送行為、特に人骨の二次的移動に伴う再埋葬行為の復元とその社会的意味について検討した。分析対象である大友遺跡および雀居遺跡では、一次葬に関連した明確な再埋葬のほか、埋葬の意図がやや不明瞭な再埋葬／再埋置も確認された。特に大友遺跡では、埋葬／再埋葬行為の復元から、同一の場所で複数回にわたる支石墓造営が行われていたことが示唆される。両遺跡における再埋葬は、墓や被葬者間の系譜確認において、先行する被葬者の人骨そのものが重要な意味を持つ場合がある一方で、再埋葬／再埋置においてはその重要度が相対的に低下している可能性が指摘される。これらの事例は、弥生時代早・前期における、人骨を用いた即物的な祭祀行為から、より抽象化された葬地利用・墓制の共有へと葬送行為が変化していく過渡期的様相、あるいは過渡期における葬送規範の揺らぎの一端を示している可能性がある。

キーワード：弥生時代、葬送行為、人骨、二次的移動、再埋葬

1. はじめに

日本列島の先史時代は、列島内外の情報・物・人の交流により形作られてきた。その交流が日本列島全体あるいは列島内地域社会へもたらす影響の大きさは時期・地域において異なり、旧石器時代以降各時代においてその影響に関する様々な研究が行われている。その一つに弥生時代の開始期における半島からの影響がある。狩猟採集社会から農耕社会への転換期となる弥生時代の早・前期の葬送・墓制に関しては、半島からの諸要素の導入という観点から様々な議論が行われている。

ただし、弥生時代の早期から前期に関しては墓から出土した人骨資料そのものが非常に少なく、中橋孝博氏により「ミッシング・リンク」と評される時期である（中橋2005）。また、当該期は田中良之氏の文化変化モデルにおいて、全段階までの在来的な文化規範から変容し、渡来的な要素と在来的な要素が混合した文化規範として位置づけられている（田中2002）。当該期は文化規範の変容という重要な時期であるにもかかわらず、出土人骨

の少なさから、墓制（埋葬施設・墓地の空間配置など）や副葬品などの物質資料を用いた葬送行為の検討は行われているが、人骨の出土状況を用いた葬送行為の検討はほとんど行われていない。加えて、議論の焦点が葬送・墓制の系譜にあることが多く、数少ない葬送行為の主体となる人間集団への言及に関しても集落構造や墓地の空間分析に基づくものであり（小澤2005；武末2011；宮本2009；端野2023）、被葬者を対象とした研究はほとんどない。一方で、人骨の出土状況を用いた葬送行為の検討は、断体儀礼、収骨再埋葬、世代構成の復元など列島先史時代の葬送儀礼及び社会集団、親族関係の復元に大きく寄与し、それらの成果と時間的・空間的社会変容を結び付ける検討が行われてきた（田中1995：2008；舟橋2021：2022：2024bなど）。

したがって、本論では、2024年に著者が検討した弥生時代早・前期の福岡県新町遺跡に続き、同じく早期から前期の人骨が出土している佐賀県大友遺跡および前期の福岡県雀居遺跡の事例を検討する。これにより、弥生時代早・前期における被葬者の取り扱いという側面から葬

送行為の実態を明らかにし、背後に存在する人間集団の一端について意義づけを行うものである。

2. 研究史

列島における弥生時代早・前期の葬送・墓制の研究は、その性格上韓半島の葬送・墓制との比較検討から多くの研究が行われ、渡来的な要素と縄文的な要素が複合したものであることはすでに複数の研究者により指摘されている（山田2014；端野2018など）。一方で、上述のように人骨の出土例自体が少ないことから、人骨の出土状況に関する検討は、概ね縄文時代と前期末以降の諸遺跡を中心とした埋葬姿勢の系譜論が行われてきた（乗安1993；福永2007；田中2001；宮本2012；端野2018など）。ただし、韓半島南部の加徳島獐項遺跡（呂他2014；徐2004など）や靉島遺跡で明らかにされているように、伸展葬・屈葬の双方が韓半島南部には存在しており、列島の縄文時代後期・晩期においても同様な状況である。これらのことから、埋葬姿勢からの単純な系譜関係への言及は難しいものの、田中氏が行っているように、死出の装具という葬送観念を念頭に置いた埋葬姿勢の意味づけのように人骨の詳細な出土状況を葬送行為総体の中に組み込むことで、その一端を明らかにすることが可能になっている（田中2001）。

当該期の埋葬姿勢以外の数少ない人骨出土状況からみた葬送行為に関する先行研究は福岡県新町遺跡に関するものである。新町遺跡では弥生時代早・前期の支石墓と人骨が出土しており、複数個体が出土している墓について、「追葬」ないしは首狩りに基づく「首級」との評価が行われている（橋口・池辺1987）。その後、これらの報告時の評価は再検討されることなく、とくに後者の「首級」に関する事例は、北部九州弥生時代前期の墓地遺跡においてしばしば認められる、土壇墓底部に付属してみられる小土壇の機能を示唆する根拠例として用いられるようになった（橋口1995；寺前2017）。

ただし、これら新町遺跡の「追葬」および「首級」という評価に対しては、近年、再検討を加えた論考が散見される。前者の「追葬」については、柴尾俊介氏（2019）が、墓壇の掘り直し痕跡が認められないことから、縄文時代の「部分骨合葬」（山田2013）に類似した行為であ

るとの指摘を行っている。また、後者の「首級」については、乗安和二三氏により、山口県土井ヶ浜遺跡で多くみられる頭蓋に特化した収骨・再埋葬の可能性が指摘されている（乗安2007；2014）。これらの諸事例について、著者は人骨そのものおよび出土図の精査に基づき、葬送行為の再検討を行っている（舟橋2024a）。その結果、新町遺跡においては特定の場所に繰り返し墓を構築する過程において、意図的あるいは非意図的に先行する墓を破壊し、そこから出土した人骨を収骨して、新たな墓に一次葬個体とともに再埋葬・再埋置する行為が行われていたことを明らかにしている。加えて、時間の経過とともに葬送儀礼における系譜観念の確認の方法が、人骨そのものを用いた即物的な儀礼行為から、墓の空間配置を用いた非即物的な儀礼へと変容していた可能性を指摘している。

このような、一度埋葬された遺体が再度掘り起こされ、二次的に移動されて再埋葬・再埋置される行為は、日本列島において縄文時代以降、現代に至るまで連綿と認められる。なかでも、明確な意図性をもって再埋葬されたことが確認できる数十体から百体近い個体を対象とした再埋葬事例は、縄文時代および弥生時代に少数ながら存在し、社会の変容との関連が指摘されている（山田1997；田中2008など）。加えて、縄文時代・弥生時代ともに多数個体の再埋葬はジェンダーや親族を紐帯とした集団の存在などが表出した行為であることがわかっている（山田1997；田中2008a；高椋2024；石川2024など）。

一方、少数個体を単独で、あるいは一次葬とともに再埋葬・再埋置する事例は、時期や地域を問わず多数認められる。縄文時代においては、生前の関係を確認するためとされており（設楽1993）、一次葬と二次葬個体の合葬は山田氏により「部分骨合葬」と定義され「夫婦や親子、祖父母と孫などその両者の現世における系譜的・社会的関係性を死後においても確認し、維持・強化するため」に行われた「系譜的生死観に基づく」行為とされている（山田2013）。本論で扱う弥生時代における再埋葬・再埋置に関しては東日本で研究が進んでいる。意図性の確実な土器棺への再埋葬行為に関する言及、論考は数多くみられる（春成1993；設楽2008；石川1981など）。その要因としてはいわゆる弥生時代文化複合と在来の文化複合の接触に伴う社会現象として説明されており、意図性が明確かつ計画的であり上述の縄文時代の多数個体の

再埋葬事例に近いものとして評価されている。一方で、弥生時代の西日本における再埋葬に関する研究はあまり進んでいない。ただし、土井ヶ浜遺跡においては、人骨が豊富に出土しており、乗安氏により一次葬への二次葬個体の合葬例が報告されており、頭部のみの収骨が顕著であることから「再葬の一義的意味は頭部骨そのものに、より大きな比重が内在」（乗安2014）とされている。加えて、長崎県富の原遺跡においては、松下真実・松下孝幸氏および松下氏らにより甕棺墓を用いた一次葬と二次葬の合葬例が報告されている（松下・松下2022；松下・分部・中谷1986）。前者は収骨部位のみに着目した再埋葬行為の意味への言及、後者は事実関係の報告にとどまっておろ行為の社会的意味や背後にある社会集団への言及は行われていないが、これはひとえにこれらの論考が事実の報告を目的としていることによるものである。一方で、上述の著者の新町遺跡の再検討では、人骨の出土状況から二次的移動個体の再埋葬・再埋置に関する検討と葬送行為の実態解明を行った（舟橋2024a）。これはあくまで1遺跡のみの検討であるが、再埋葬を単独で扱うのではなく墓域における墓の空間配置にも目を向けることで、上述のように弥生時代早期・前期における儀礼の非即物化の可能性を指摘することができている。

以上見てきたように、単独ないしは少数個体の再埋葬行為に関しても、縄文時代および弥生時代東日本のように事例数を多く収集することでその社会的な背景に言及することが可能である。一方で新町遺跡の検討において明らかなように、墓地全体の中での同時期の埋葬との関係を明らかにすることでその葬制や葬送観念の変容を明らかにすることが可能になるといえる。したがって、本論では、新町遺跡と同様に、これまで再埋葬の検討が行われてこなかった北部九州の弥生時代の早期・前期の葬制の中で再埋葬に関し、その実態を明らかにし葬送行為の復元を行うとともに、行為の背後にある社会的意味や葬送観念について言及したいと考える。

3. 方法と対象

対象資料は、早期および前期の人骨が出土している大友遺跡と雀居遺跡とし（図1）、当該期の埋葬のうち二次的な移動を伴う可能性の高い遺構を中心に人骨出土状



図1 遺跡分布図
（国土地理院デジタル標高地形図より引用改変）

況を詳述する。これらの事例のうち一度埋葬された後に掘り返されて移動されている可能性が高いものに関して、「再埋葬／再埋置」とする。さらに、その中でも再埋置する際に「棺ないしは土壌内に埋置する」「長管骨を揃える」という現象がみられ扱いがより丁寧な場合には埋葬する意図が明瞭であると判断しこれを「再埋葬」とする。

人骨の出土状況に関しては、大友遺跡の1-4次調査に関しては佐賀県文化財課収蔵、5・6次調査に関しては九州大学大学院人文科学研究院収蔵、雀居遺跡に関しては福岡市埋蔵文化財センター収蔵の人骨出土原因及び遺構検出図・写真をもとに検討を行った。加えて、大友遺跡5・6次調査および雀居遺跡に関しては九州大学比較社会文化研究院基層構造講座収蔵の人骨が観察可能であったため、図面・写真との対応関係を確認した。

なお、人骨の年齢推定は、咬耗は柘原（1957）を用い、性別判定には、Buikstra and Ubelaker（1994）を基準に、頭蓋・骨盤を用いて判定を行った。加えて、四肢に関しては中橋氏の四肢を用いた性別判定の基準値（中橋1988）を用いて行った。この方法は本来複数の計測値を用いて行う方法であるが、残存部位が少ない場合にも、性別の可能性を示す方法として援用する。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上（詳細は不明）とする。

4. 分析

i) 大友遺跡

本遺跡においては支石墓が弥生時代早期から前期末の間に造営されており、5・6次調査の際に再検出された4次調査出土支石墓も含め計11基が確認されている。加えて、弥生時代前期に相当すると推定される土壌墓（配石墓）も確認されている（表1）。本遺跡においては一次埋葬後に二次的な操作を受けたと推定される人骨は多く確認できるが、ここでは時期の推定が可能な遺構で確実に二次的な移動を確認できた遺構のみ検討の結果を記述する。

【4次調査57号墓支石墓：早期～前期前半事例】

4次57号支石墓では、下部構造の土壌内から人骨が2体分出土している（図2）。本遺構の時期に関しては、近接して出土した大友遺跡5・6次調査出土支石墓のうち下部構造が土壌の埋葬は時期が早期～前期前半に比定されていることから、本遺構も同時期に造営されたものであると推定される。発掘時の報告では、本支石墓からは一次葬个体（A号）と二次葬个体（B号）が出土していること、二次葬个体は一次葬の土壌底部直下から出土し

た敷石を持つ「敷石墓」に埋葬されていた可能性が高いことが報告されている（藤田1981）。その後、宮本一夫氏が大友遺跡の5・6次調査において多数の支石墓を発掘しその報告において、敷石の分類から本遺構を大友遺跡の支石墓の中でも第3段階である大友Ⅲ式に位置付けている（宮本2001；2003）。

まず、人骨の出土状況についてみていこう。A号とされる一次葬个体は頭位東向きの仰臥屈葬で、上肢は左右ともに肘関節を軽屈・回内し手を腹部上に置いており、右前腕には貝輪が装着されている。下肢は股関節をやや屈し膝関節を強屈させ、膝を右側に倒した状態であり、大腿部の南西側に下腿部が接した状態で出土している。このA号の膝関節直下からB号とされる別个体の頭蓋が出土している。加えて、A号の下肢南側からは長管骨が長軸を東西に揃えた状態で出土している。本人骨資料に関しては実見が困難であり図面・写真との対比が困難である。加えて、B号長管骨はいずれも骨体部のみでそれぞれの部位の特徴が出ている骨端は遺存していないように描かれており、図面上で骨の形状に基づく部位の推定が困難である。ただし、原図上で骨のサイズを確認すると、二次葬と考えられる人骨群の長管骨は①幅径約1cm

表1 大友遺跡早期・前期の墓

調査次	号数	性別	年令	上部構造	下部構造	副葬品	考古時期	支石墓 分類	較正年代 (cal)	
									1σ	2σ
4次	57号A	熟年	男性	支石墓	配石	貝輪	弥生早期～前期前半			
4次	57号B	成人	男性		配石		弥生早期～前期前半	Ⅲ		
5次	1号-1	男性	成年	支石墓	甕棺	無し	弥生前期後半	Ⅳ	750-570 BC	780-510 BC
5次	2号-1	男性	熟年	支石墓	甕棺	無し	弥生前期末	Ⅳ	350-200 BC	370-170 BC
5次	2号-4	男性	成人		配石?	貝輪・小壺	弥生早期～前期前半?		730-430 BC	740-400 BC
5次	2号-4	女性	成人		配石?	貝輪・小壺	弥生早期～前期前半?			
5次	3号	男性	熟年	支石墓	配石	なし	弥生早期	Ⅱ	760-550 BC	800-470 BC
6次	4号	女性	熟年	支石墓	配石	なし	弥生早期～前期前半	Ⅲ		
5次	5号	男性	成年	支石墓	配石	なし	弥生早期～前期前半	Ⅲ	730-580 BC	750-420 BC
5次	6号	男性	熟年	支石墓	配石	小壺	弥生早期	Ⅰ	790-580 BC	810-510 BC
5次	7号	女性	成年	支石墓	配石	小壺	弥生早期	Ⅰ		
5次	8号	女性	熟年	支石墓	配石	貝輪	弥生早期	Ⅱ	750-580 BC	800-520 BC
6次	21号	—	—	支石墓	配石	なし	弥生早期	Ⅰ		
6次	23号	不明	不明	支石墓	配石	なし	弥生早期～前期前半	Ⅲ		
6次	27号	男性	熟年		配石	なし	弥生前期			
6次	34号	不明	成人		配石墓	小壺	弥生早期			
6次	35号	男性	熟年		甕棺墓	なし	弥生前期		230-80 BC	350-50 BC
5次	36号	男性	成年		配石墓	なし	弥生前期前半		540-410 BC	730-390 BC
6次	38号	女性	熟年		甕棺墓	なし	弥生前期			
6次	43号	女性	成人		土壌墓	小壺	弥生前期			

支石墓分類は宮本2001、年代測定値は瀧上ら2021による。

考古時期は基本的には宮本2001：2002に従うが、34号配石墓に関しては出土土器の編年（端野2016）にしたがい早期とする

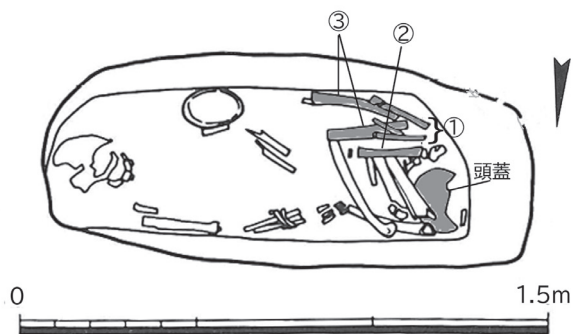


図2 大友遺跡4次57号墓人骨出土状況
(呼子町教委1981より引用改変)

×長さ15-20cm程度, ②幅径約2cm×長さ20cm程度, ③幅径3-4cm×長さ20-25cmの3種類が少なくともそれぞれ2本, 1本, 2本確認できる。これらの人骨の幅径と長さを中橋氏および松下孝幸氏により既報告の大友遺跡弥生時代人の計測値(表2)と比較すると, ①が前腕ないしは腓骨の破損したもの, ②が上腕骨, ③が大腿骨ないしは脛骨と推定される。したがって, 二次葬个体であるB号は頭蓋・上肢・下肢が含まれると考えられる。

次に, 遺構と人骨の關係に着目する。報告では本遺構の下部構造は, A号人骨に伴うものはその左上肢付近から出た1点のみで, 残りの15点の配石はすべて先行するB号人骨に伴う「敷石墓」と報告されている(藤田1981)。これらの敷石と人骨の關係を検討してみよう。敷石と人骨の水平的な位置關係を見ると, 敷石全体がA号およびその墓壇よりもかなり東側に偏っており, 敷石範圍の長軸もA号人骨とはズレが生じている(図3)。B号に伴うと推定される石の中でも扁平でかつ平らな面を水平にした, 確実に墓壇底部に置かれたと推定される石の範圍でB号の墓壇底を復元するとA号の墓壇よりも20-30cm程度東側の位置にB号の墓壇があったと推定される。一方で, 垂直な位置關係に関しては, 遺構断面図の軸がA号とB号で若干異なるもののこの軸の違いによりレベル

表2 大友遺跡弥生人骨四肢計測値

大友遺跡男性四肢骨計測値(長さおよび幅径)		単位mm			
		1-4次		5・6次	
	martin No.	N	M	N	M
上腕骨	1 最大長	11	291.4	2	294.5
	5 中央最大径	34	23.4	7	25.3
	6 中央最小径	33	17.6	7	18.3
橈骨	1 最大長	6	231.5	2	225.5
	4 骨体横径	25	17.1	4	18.8
	5 骨体矢状径	25	12.4	4	12.5
尺骨	1 最大長	9	249.6	-	-
	11 矢状径	26	15.0	4	13.5
	12 横径	26	17.2	4	19.8
大腿骨	1 最大長	15	420.1	6	411.8
	6 骨体中央矢状径	41	28.6	10	30.4
	7 骨体中央横径	42	26.4	10	26.7
脛骨	1 全長	10	345.3	-	-
	8 中央最大径	43	31.0	-	-
	9 中央横径	43	21.4	-	-
腓骨	1 最大長	-	-	1	345.0
	2 中央最大径	-	-	5	16.0
	3 中央最小径	-	-	5	11.6

1-4次: 松下1981、5・6次: 中橋2003

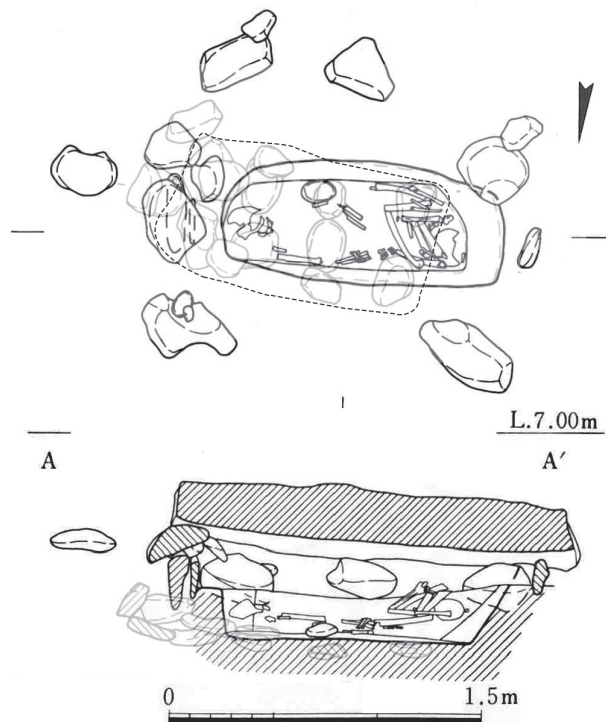


図3 大友遺跡4次57号墓復元図
(呼子町教委1981より引用改変)

薄い線: B号に伴う敷石. 点線: B号の推定墓壇ライン

に大きな差は生じないため, これを用いて出土レベルを比較すると, 人骨と敷石の間には最も狭い頭部付近で10cm, 広い下肢付近で30cm程度の差が生じる(図3)。し

たがって、これらの敷石に関してはA号に伴う敷石ではなく藤田氏の指摘する通り先行するB号人骨に伴うものと推定される。

加えて、本支石墓には支石が多く13点が確認されている。中でも、最も東側で検出された支石に関しては、上石から30cm程度離れた位置から出土しており、A号の埋葬に伴う上石の支石としては機能していない。ただし、その他の支石と出土レベルやサイズは同じであり、一連の支石と評価できる。一方で、同じ大友遺跡5・6次調査において検出された支石墓をみると、本事例のように支石が上石の範囲からも墓墳の上面ないしは肩口からも外れる事例はない。さらに、B号に伴うと推定される下部構造の敷石との位置関係を考慮すると、この上石の範囲から大きく外れた支石は57B号に伴う上石の支石であった可能性を想起させる。

【5次調査2号支石墓棺外人骨および1号甕棺と棺外人骨：早期～前期事例】

5次2号支石墓では、下部構造は支石及び前期末（金海式）の合わせ口成人棺1基（1号棺）と2基の未成人棺（2, 3号棺）から形成されておりそれぞれ熟年男性および幼児と乳児が1体ずつ出土している（図4：宮本2001）。報告書内では、2号小児棺がやや上石の範囲からはみだしているため、1号棺埋置後上石を乗せた後に上石を少し動かして2号棺を埋置した可能性も指摘されている。このほかに1号甕棺の埋土中からは、夜臼式の小壺の口縁部片や管玉・貝輪（図5）とともに、男性のほぼ1体分と女性の上腕骨とされる別個体の人骨が出土している（中橋2001）。これらの埋土中の人骨及び遺物の存在から、この場所には先行して土壌墓が存在していた可能性が指摘されている（宮本他2001）。これら棺外出土人骨の出土状況の詳細は不明であるものの、調査日誌によると、1999年9月14日に1号成人棺の検出時に上甕南側の胴下半部と同程度のレベルから管玉1点および人骨・供献土器片の出土が記されている（以下A人骨群とする）。さらに、同15日に2号甕棺（小児棺）を取り上げた後の1号甕棺の下甕掘り下げ段階において、その西側から人骨及び貝輪が出土したことが記載されている（以下B人骨群とする）。

出土人骨の検討 埋土から出土した人骨は、男性ほぼ1体分および女性と思われる左上腕骨（中橋2001）として報告されている。本稿に伴う実見の結果、複数個体分が

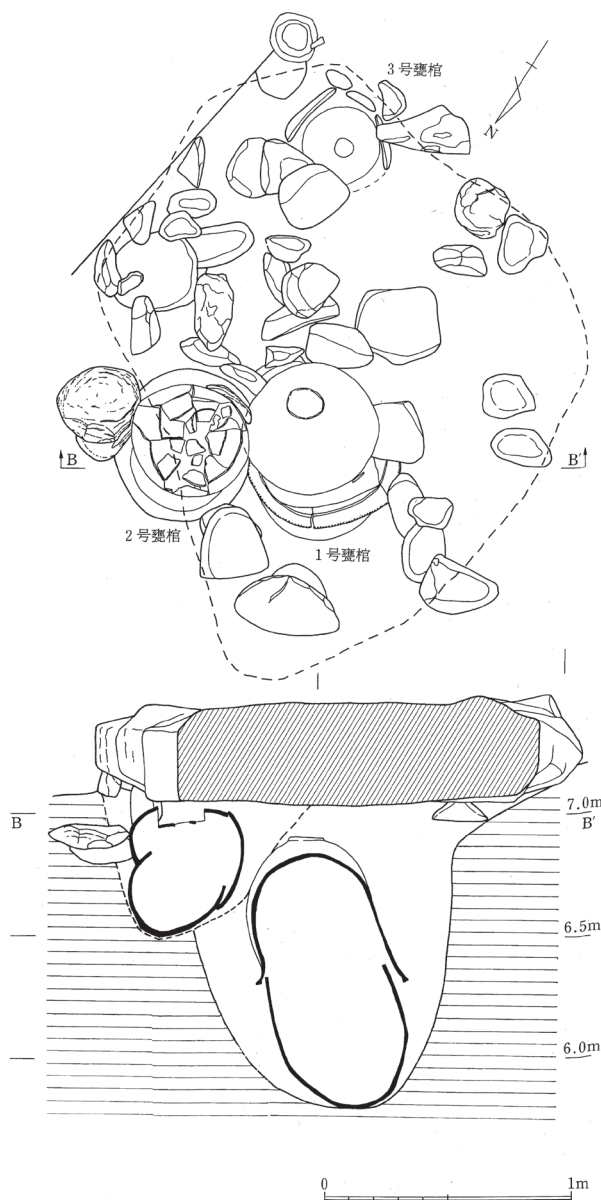


図4 大友遺跡5次2号支石墓全体図（宮本2001より引用改変）

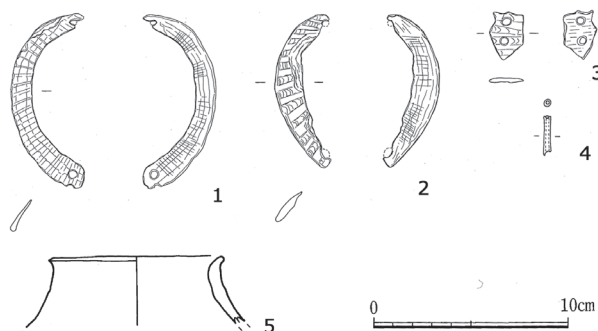


図5 大友遺跡5次2号支石墓1号甕棺墓墳内出土遺物（宮本2001より引用改変）

1・2：貝輪，3：貝製品，4骨製管玉，5：夜臼小壺片

出土している部位として、頭蓋男女2体分および右肩甲骨・左上腕骨骨体部が確認できた。この他にも1体分が出土している部位として、上下顎の歯牙(咬耗度栃原1957の2° b)、軀幹骨のうち癒合した胸椎片、上肢の肩甲骨および左鎖骨、右上腕骨、右尺骨・橈骨、左橈骨、下肢の右恥骨下枝、左右大腿骨、右脛骨が遺存している(図6)。これらの人骨群の性別に関しては、2体分出土している頭蓋を見ると、乳様突起及び外後頭隆起の発達している個体と発達していない個体がみられる。なおかつこれらの頭蓋骨の縫合状況は、乳様突起が発達していない個体のラムダ縫合外板が開いており、内板は一部閉じかけており、乳様突起が発達している頭蓋骨に関してはラムダ縫合は内板外板ともに閉じかけている。加えて2体分出土している左上腕骨の骨体最小周に関しては、縄文集団の性別の境界値よりも大きい65mmと小さい58mmである。したがって、これらの人骨はともに成人に達している男女各1体ずつであると判定される。また年齢に関しては、胸椎の癒合および歯牙咬耗度から少なくともいずれか1体は熟年に達していたと推定される。

埋葬過程の検討 これら2体の棺外出土個体に関して出土状況を精査し埋葬過程を復元してみよう。これらの人骨の詳細な出土状況は不明であるものの、これらの人骨を出土したまとまりとの対応で見ると、発掘当日に付された遺物整理番号の「373」の人骨群と「450番台」が付された人骨群があり、14日に出土したA人骨群と翌15日以降に出土したB人骨群に相当すると考えられる。A・B異なる人骨群から出土した破片が接合するものとして右大腿骨・左大腿骨があり、B人骨群のうち同じ「458」番が付されており近接して出土したと推定される人骨群に左上腕骨2体分が含まれる。したがって、これ

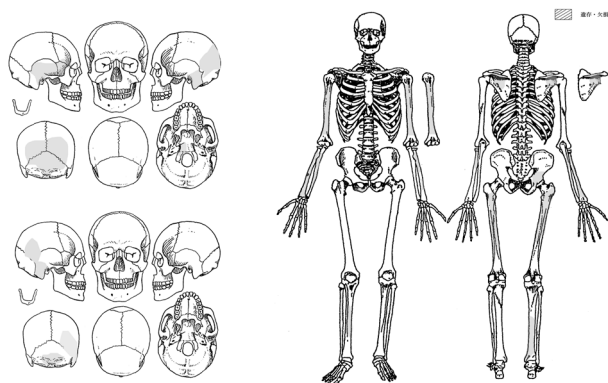


図6 大友遺跡5次2号支石墓墳内出土人骨
網掛: 残存部位

ら2個体は個体ごとにまとまって別の場所から出土しているわけではなく、各人骨群に2体分の人骨が混ざった状態で出土していた可能性が高い。

次に、これらの人骨の原埋葬位置に関して検討を行う。人骨に伴い副葬されていたと推定される貝輪および小壺片が出土している。貝輪に関しては、前腕に装着されている場合が多いため軟部組織が完全に腐朽している場合でも人骨と一緒に移動される可能性はあるが、本事例は組み合わせ式の貝輪であるためこの限りではない。副葬小壺に関しても身体着用品ではないため、遺体とともに他所から本墓構内に持ち運ばれた可能性は低い。以上の通り、これら棺外人骨および副葬品から、1号甕棺が埋置された場所に先行して作られた墓があった可能性が高く、報告時の1号甕棺に先行する墓が存在したという評価(宮本他2001)は妥当であると判断できる。

一方で、これら棺外出土人骨は2体であったという点から、1号甕に先行する墓が2基の土壌墓であった可能性と、4次57号支石墓のように再葬個体を伴う一次葬の墓1基であった可能性の2通りが想定しうる。前者の場合に関しては、大友遺跡5次調査で検出された同時期の支石墓下部構造の土壌のサイズおよびその空間的配置が参考になろう(図7)。宮本氏によると、弥生時代早期から前期前半(夜白~板付I式期)にかけて営まれていることが明かになっている支石墓及び土壌墓は調査範囲の南側に大きく偏っているものの明瞭な切りあい関係は確認されていない。したがって、2号支石墓の下部構造の範囲に同時期の切りあわない土壌墓2基を想定するならばかなり近接した状態であり、遺構の検出が難しい砂丘遺跡においては巨大な墓墳として認識されると予想されるが、1号甕棺の墓墳に切られる形ではこのような土壌プランは確認されていない。加えて、2・3号甕棺の周辺の掘り下げ時に1号甕棺周辺のような人骨は検出されていない。一方で4次57号墓のように1基分の土壌墓のみであれば、複数基の甕棺の埋設による攪乱で墓墳が大きく壊されており、墓墳プランが検出困難であった可能性はある。したがって、同時期の墓の空間配置から考えると、棺外人骨群A・Bは2基の土壌墓から出土した一次葬個体と考えるよりは、むしろ1基の土壌墓内から出土した4次57号墓に類する事例であった可能性が高い。

この先行する墓の時期に関しては、埋葬容器として甕を用いていないことから下限は少なくとも前期前半であ

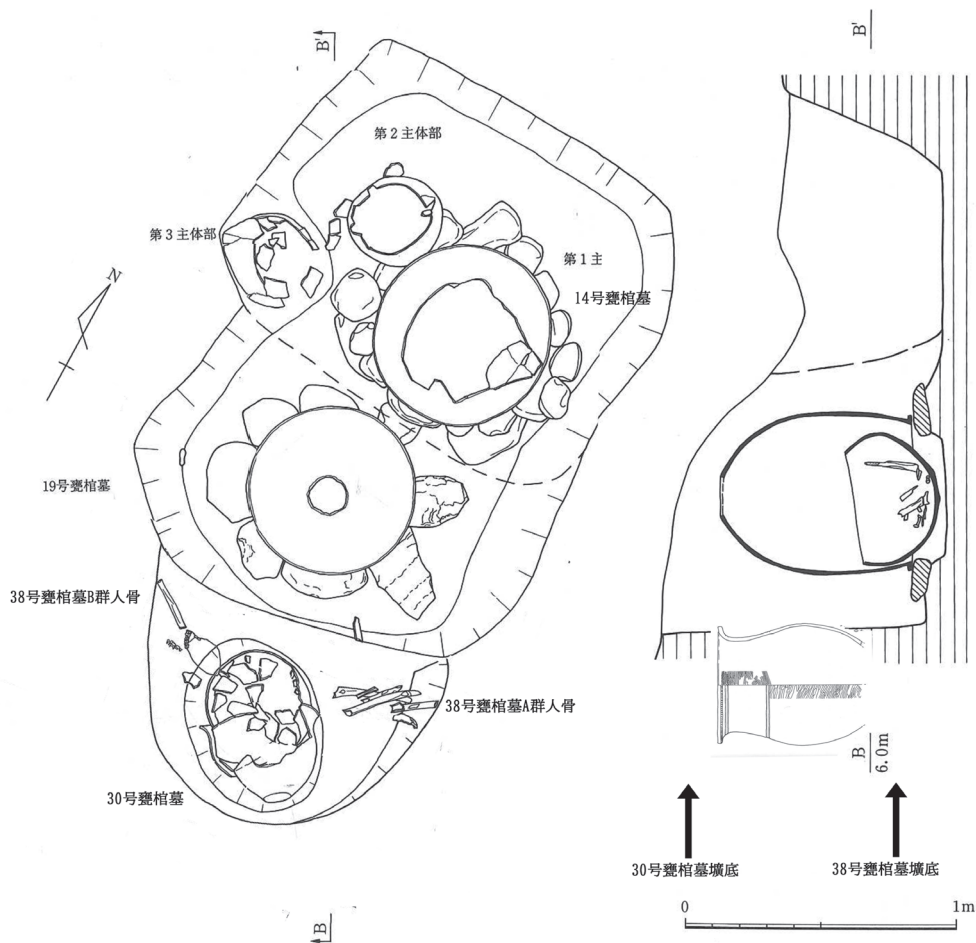


図8 大友遺跡6次38号甕棺墓周辺遺構図（宮本2003より引用改変）

号支石墓1号甕棺の棺外人骨は1号甕棺が埋置された場所に先行して墓が存在しており、棺外から出土した2体は同一の墓に埋葬されていた可能性が高く、その墓を破壊する形で1号甕棺が埋置されたといえる。

【6次38号甕棺：前期事例】

38号甕棺（前期末）の墓壇内部から38号墓に伴うと考えられる人骨が2体出土している。38号墓の埋葬容器である甕そのものは、後続する墓の造営時に破壊されており、甕棺の破片が墓壇上半部から出土している（図8）。墓壇底付近の西側と東側のそれぞれから出土した人骨の性別が異なることから、どちらか1個体のみが本来の甕の被葬者であったと推定されており、38号甕棺は19号成人甕棺（中期）ないしは30号小児棺（前期）を作る際に破壊された際に人骨が甕棺内から甕棺外に流出したとされている（宮本他2003）。人骨の形質所見においては、西側出土個体がA号人骨（熟年女性）、東側がB号人骨（成年性別不明）とされている（中橋2003）。

出土人骨の検討 A号人骨およびB号人骨のそれぞれの

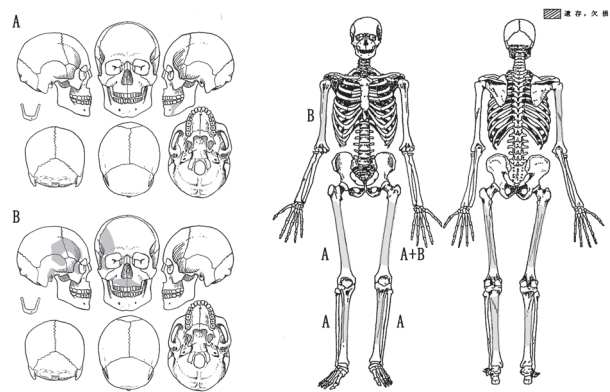


図9 大友遺跡6次38号甕棺出土人骨残存状況
（網掛：残存部位）

残存状況を見ていこう（図9）。A号人骨は、下顎体左側の臼歯部相当部位と左右大腿骨および脛骨の骨体部が遺存している。下顎骨は第2小臼歯および第2大臼歯の歯槽窩が開放しており、第1大臼歯・第3大臼歯の歯槽窩が閉鎖している。したがって少なくとも成人に達していると推定される。一方で性別に関しては、中橋氏の基準値（中橋1988）を用いると、A号人骨の大腿骨中央周お

表3 大友遺跡四肢骨計測値に基づく性判定

単位mm

部位名称	計測部位	2号支石墓棺外人骨		38号甕棺				縄文集団の男女境界値				
		右	左	右	左	右	左	右	左	北部九州	津雲	吉胡
上腕骨	M7	最小骨体周	65	58	70				61.5	59.1	63.5	61.6
大腿骨	M8	骨体中央周	95		77	77	83	85.0	82.1	85.1	84.2	
脛骨	M10a	栄養孔位周			80				86.6	86.0	88.5	87.4

縄文集団の境界値は中橋1988より引用

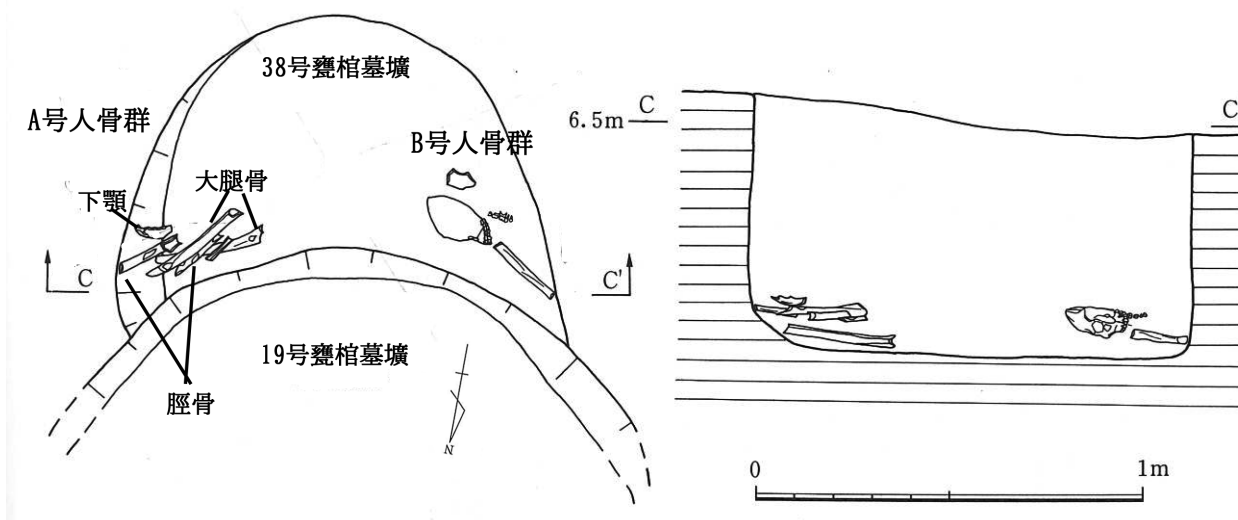


図10 大友遺跡5次38号甕棺人骨出土状況（宮本2003より引用改変）

よび脛骨栄養孔位周は縄文及び弥生時代のいずれの集団においても男女の境界値を下回る値であることから女性の可能性が高い（表3）。以上の歯槽窩の閉鎖状況及び大腿骨の計測値から、これらの四肢と歯牙の組み合わせは、成人女性の可能性が高い。

B号人骨は、前頭部から右側頭部にかけてと上下顎の歯牙全てが遺存している。加えて、右上腕骨が遺存している。歯牙は咬耗度が栃原の1°b～2°aであり（栃原1957）成年と推定される。近接して出土している上腕骨は太く三角筋粗面も発達しており、上腕骨の骨体最小周は70mmであり中橋氏（1988）の縄文集団の境界値である61.6より非常に大きい値である。したがって、B号人骨は成年男性と推定される。なお、このほかにも出土図には描かれていないがB号人骨に帰属すると推定される左大腿骨が出土している。この骨体中央周に関しては83mmであり中橋氏の大腿骨による性別判定の基準値と比較すると、津雲縄文集団では男性に判定される値であり、縄文集団全体と吉胡縄文集団では女性に判別される値である。

埋葬過程の検討 上述の通り、38号甕棺に伴う墓壙から

は2体分の人骨が出土しており、人骨の出土所見に記されている通りそれぞれの個体が墓構内の東西に分かれてまとまった状態で出土している（図10）。A号人骨は女性と判定される下肢骨群と下顎骨であり、下肢骨は長軸をそろえた状態で出土している。これらの下肢骨は東側から右脛骨が、西側から左大腿骨、左脛骨、右大腿骨が上下に重なった状態で出土している。左右大腿骨はそれぞれ近位を南西、遠位を北東にした状態で出土しているが、脛骨は右脛骨が近位を北東、遠位を南西にしているのに対し、左脛骨は近位を南西、遠位を北東にした状態で出土している。加えて下肢の南東側に接した位置から下顎骨が出土している。したがって、これらの下肢は解剖学的な位置関係を保っておらず、軟部組織がほとんど遺存していない状態で収骨されこの場所に長軸をそろえた状態で再埋置された可能性が高いといえる。一方で、西側のB号人骨は頭蓋骨が頭頂部を東、顔面を北に向け口が開いた状態で出土している。上下顎はともに歯列を保持しており、臼歯部咬合面が近接する位置から出土していることから、顎関節は関節状態であった可能性が高い。

この頭蓋骨の西側から右上腕骨が出土している。

以上出土状況と前述の人骨の所見を総合すると、墓壇西側には軟部組織が遺存している状態の人骨が、東側には骨化した状態の人骨が埋置されていたといえる。したがって、これらのA、B号人骨は相対的に軟部組織の腐朽度の低いB号(成年男性)が本来甕に埋葬されており、軟部組織の腐朽が進んでいたA号(成人女性)がこれに先行する再埋葬された個体であったと推定される。この場合、38号甕の棺外にA号人骨1体分が埋葬(埋置)されていた可能性と同一棺内で一次葬個体であるB号人骨に二次葬個体であるA号人骨が合葬されていた可能性が考えられる。前者は先述の大友遺跡5次2号支石墓1号甕棺が類例として挙げられ、後者の場合は弥生時代中期の長崎県富の原遺跡(大村市教委1995)が挙げられる。

以上の大友遺跡の早期・前期における被葬者の二次的移動行為に関してまとめると、以下ようになる。

- ・一次葬個体に接して二次葬個体を再埋葬(4次57号支石墓)。
- ・一次葬個体埋葬容器外に二次的移動個体の再埋葬・再埋置(5次2号支石墓1号甕棺)。
- ・一次葬個体埋葬容器内もしくは外に二次的移動個体の再埋葬(6次38号甕棺)。

なお、5次2号支石墓埋土出土人骨群に関しては、4次57号支石墓に類した状態であったと推定される。

ii) 雀居遺跡

雀居遺跡においては7次、9次調査および10次、13次調査において前期中頃とされる土壇墓が検出されている。雀居遺跡全体で土壇墓を含めた前期の墓が検出されているのは3か所であるが、成人を中心とし生活空間と区別された墓域と認定しうるのは微高地縁辺部の7・9次調査による東墓域と微高地の反対側に位置する13次調査区で検出された西墓域の大きく2か所である(力武2003)。このうち、7次および9次調査出土の3基(1号、4号、9号土壇墓)に関して人骨の報告一覧表に「集骨」の文言が記載されている(図11)。ただし、詳細な記述はなく、報告の「まとめ」においても6・9号墓の下肢の錯綜に関して木棺ないしは二次的な移動の可能性を指摘するのみである(福岡市教委2000)。したがって、本稿では東墓域にあたる9基の土壇墓に関して出土原図を精査し、人骨の二次的移動もしくは収骨再埋葬の可能性が高

い墓を抽出した。なお本分析で取り上げる墓は板付Ⅱ式の小壺を副葬された5号土壇墓に切られている(7・8号土壇墓)ないしはこれらと墓壇長軸をそろえている墓(6号土壇墓)を中心に構成されていることから、5号土壇墓に先行するあるいは時期的に併行する前期中頃の墓として取り扱う。

【1・6号土壇墓】1号土壇墓は報告においては、「全体に雑然としているが体幹は本来の位置を保っているものと考えられる。東を向く横臥屈葬」と記述されている。出土図を確認すると60×70cmの範囲から人骨が出土している(図12)。平面的な人骨の位置関係を見ると、最も北側から頭蓋骨が出土しており、東側からは長管骨が長軸を南北にした状態で複数本出土している。墓壇内西側からは軀幹骨がまとまった状態で出土している。東側の長管骨の中で最も高い位置からは左大腿骨が出土しており、頭蓋上に近位の大腿骨頭がのった状態である。加えてこの大腿骨の遠位側の最下層からは右寛骨が出土している。同じく最下層の最も東側からは左大腿骨が近位を北、遠位を南にした状態で出土している。これら出土人骨で関節状態を保っている部位はほとんどない。以上の出土状況から、1号土壇墓出土人骨(以下1号人骨)は一次埋葬個体のほぼ全身を軟部組織の腐朽がある程度進行した後に収骨再埋葬された事例であると考えられる。

なお、1号人骨は6号土壇墓出土人骨(以下6号人骨)の左右脛骨に挟まれた状態で、6号の右脛骨上から1号人骨の集積が出土している。6号人骨自体は頭位を東にとり、仰臥で股関節を伸展、膝関節を屈した姿勢で埋葬されているが、胸郭付近から左右骨盤にかけての骨がやや乱されている。具体的には肋骨および椎骨が右上腕骨北側に15cm程度離れた位置から出土しており、右鎖骨は右寛骨および右橈骨・尺骨は腰部北側から出土している。加えて左寛骨は上下が逆転し、恥骨側が頭側、腸骨翼側が膝側を向いている。また、左膝関節はほぼ解剖学的位置関係を保ってはいるものの左腓骨が右大腿骨直上から出土している。したがって、ある程度骨化が進んだ段階で上半身を中心に遺体が乱されていると推定される。なお、1号のものと考えられる左右の腓骨が6号の左尺骨下から出土しており、攪乱は1号埋葬→6号埋葬・1号再埋葬→攪乱というタイミングであったと推定される。

【3号土壇墓】本土壇墓は報告において、「埋葬された姿をとどめていないものであろう」と記述されている(図

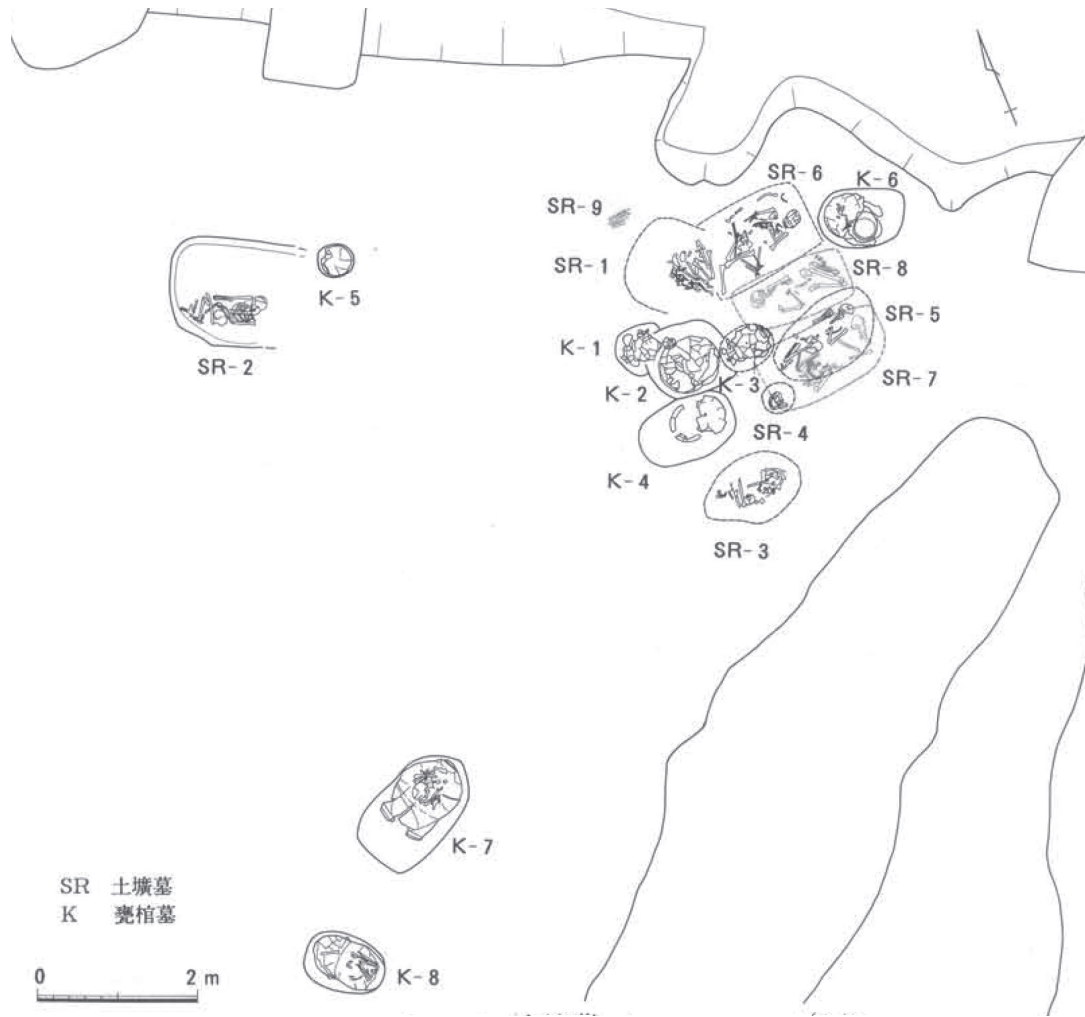


図11 雀居遺跡7次・9次調査埋葬遺構検出図（福岡市教委2000より引用）

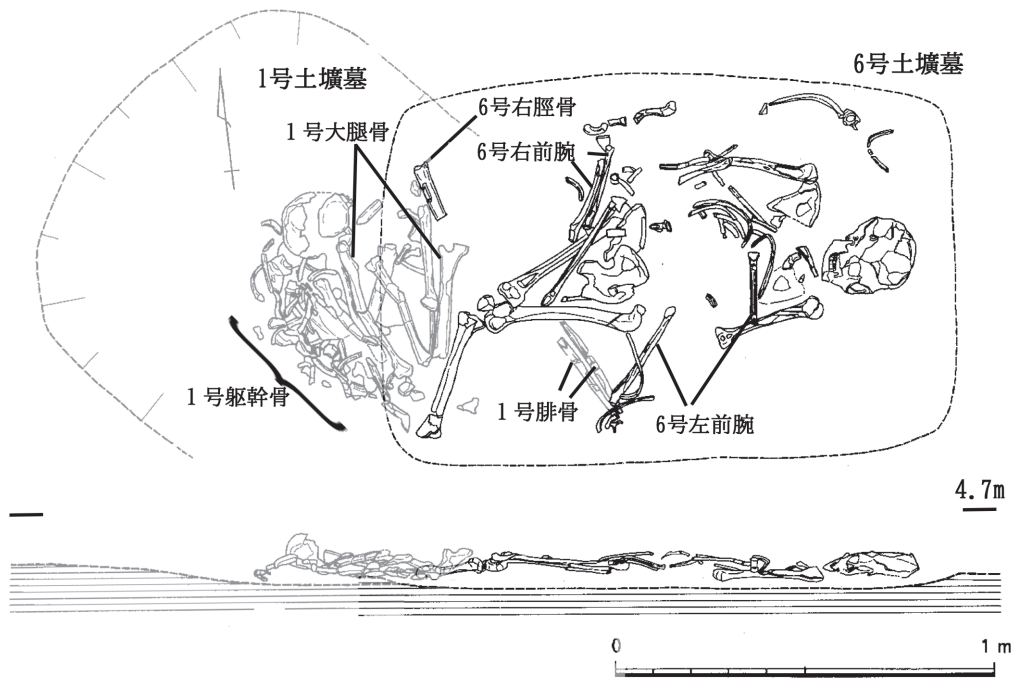


図12 雀居遺跡1号・6号土壙墓人骨出土状況（福岡市教委2000より引用改変）

薄い線：1号土壙墓および出土人骨

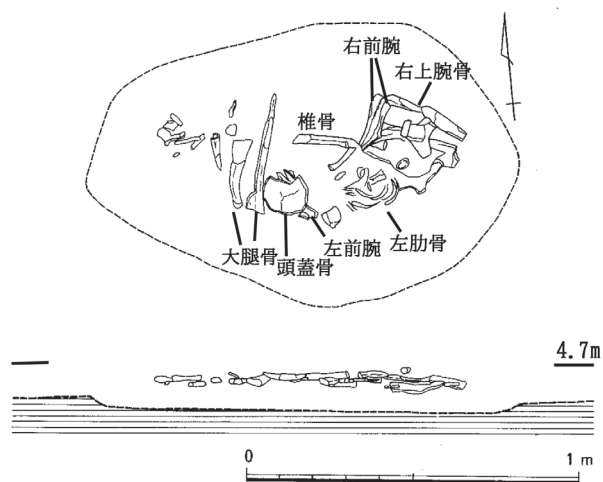


図13 雀居遺跡3号土壇墓人骨出土状況
(福岡市教委2000より引用改変)

13). 出土図を確認すると全体として楕円形の墓構内の東側から上肢及び躯幹骨が、西側から下肢骨が出土している。墓壇内東側の出土人骨のうち北側から右上肢が、肘関節を屈曲した状態で肩関節を東、手首側を西にした状態で出土している。この右上肢の下からは右肋骨が出土している。この南側からは左肋骨が出土している。一方でこれら肋骨や上肢の西側からは左右の大腿骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。したがって、概ね東に頭位を取った屈葬であることが見て取れる。ただし、本個体が通常の一次葬と異なるのが、頭蓋骨が腹部ない

しは膝付近にあたる位置から出土している点である。加えて、肋骨および前腕、趾骨など細くかつ緻密質の比較的薄く遺存しにくい部位が検出されているにもかかわらず、比較的長く太い長管骨である左上腕骨と左右脛骨が確認できていない点も通常の一次葬と異なる。したがって、本個体は埋葬時或いは埋葬後に頭部のみ出土位置に移動され、遺存していない四肢の一部についても持ち去られた可能性が考えられる。

【4・5・7号土壇墓】4号土壇墓は土壇の掘方が明瞭ではないものの7号土壇墓の墓壇西側の墓壇ラインを横切る位置から頭蓋骨が出土している(図14)。加えて、頭蓋骨とともに骨片が遺存している。そのため、報告においては「頭部だけの埋葬ではないとかがえられる」とされている。これら、4号頭蓋骨と7号人骨とともに成年不明と成年男性?として報告されている(中橋2000)。4号土壇墓の墓壇底のレベルは4.64mである。一方で、7号土壇墓出土人骨(以下7号人骨)には頭蓋骨が見当たらず、30cm程度離れた位置からこの4号頭蓋骨が出土している。加えて、7号墓と大きく墓壇を重複させる形で5号土壇墓が営まれている。これらの墓壇底を見てみると、7号人骨は上半身部分の検出レベルが4.55mである。一方で5号土壇墓の墓壇底は7号人骨の頭部にあたる部分で約4.55mであり、7号土壇墓の墓壇底とほぼ同じレベルまで掘り込んでいる。したがって、4号頭蓋骨は7

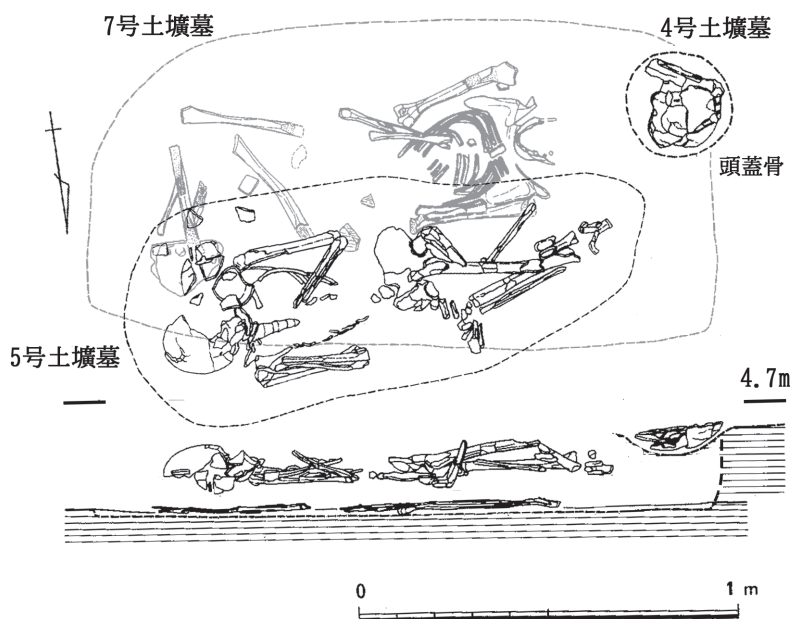


図14 雀居遺跡4号・5号・7号土壇墓人骨出土状況(福岡市教委2000より引用改変)

薄い線:7号土壇墓および出土人骨

号土壙墓に重ねる形で5号土壙墓を後続して築いた際に7号人骨の頭部といずれか一部が掘り起こされ、5号人骨の墓壙内に再埋置されたと推定される。

【9号土壙墓】本個体は土壙の掘り方は不明であるが、「二次的に移動しているようで平行にそろっている」とされている(福岡市教委2000 図15)。出土図を確認すると長管骨が4本と小片が出土しており、長管骨は長軸を東西に揃えた状態で出土している。最も北側からは左上腕骨が前面を上、近位を西にした状態で出土している。その南側からは左脛骨が近位を東に向けた状態で出土している。これらの上腕と脛骨の間からは左右不明腓骨が出土している。左脛骨の南側からは右脛骨および腓骨が出土している。したがって、上腕骨と下腿部がほぼ長軸を揃えた状態で出土していることから、一次埋葬後の収骨であれば一定度骨化が進んだ段階で収骨再埋葬されたものと推定される。なお、本遺構と最も位置に近い1号墓と6号墓出土人骨はともに上腕骨が左右揃っており、これらの遺構に伴う人骨の収骨ではないことは確実である。

以上のように雀居遺跡で見られる人骨の二次的な移動事例は、以下の3種が確認された。

- ・ほぼ一体分の二次葬個体が一次葬に接して再埋葬されている：1号・6号墓
- ・二次的移動を受けた部分骨が一次葬の近くに再埋葬・再埋置されている：4号・5・7号墓
- ・二次的移動を受けた時期が埋葬後かどうか不明である：3・9号

5. 考察

i) 葬送行為の復元

以上みてきたように、弥生時代早期から前期における遺体の二次的移動行為の所産として、大友遺跡では、早期～前期の支石墓のうち少なくとも2基、および前期末の甕棺1基において、一次葬個体に伴う二次的移動個体の再埋葬・再埋置が確認された。なかでも5次2号支石墓については、2度の再埋葬を伴う、3次にわたる埋葬の帰結である可能性が高いことが明らかとなった。

一方、雀居遺跡においても、同様に一次葬個体に伴う再埋葬・再埋置が確認されるとともに、遺体の移動時期の判断が困難な事例も認められた。これらの事象を整理

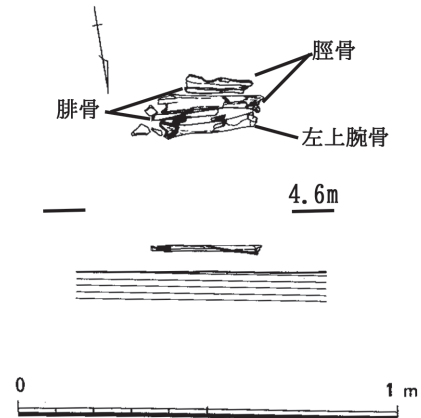


図15 雀居遺跡9号土壙墓人骨出土状況
(福岡市教委2000より引用改変)

すると、以下の3つのパターンに分類することができる。

①再埋葬：

大友遺跡4次57号墓、6次38号甕棺墓
雀居遺跡1・6号墓

②再埋葬・再埋置：

大友遺跡5次2号支石墓1号甕棺および棺外人骨
雀居遺跡4・5・7号墓

③再埋葬／遺体の離断の判断が困難：

雀居遺跡3・9号墓

なお、大友遺跡5次2号支石墓棺外人骨群の2体については、時期および推定される埋葬遺構の点から、①に類する可能性が高い。

これらの事例について、先行する墓を認識したうえで遺体の掘り返しおよび二次的移動が行われていたか否かを明らかにするため、本稿では、上部構造として永続性の高い上石の有無、および一次葬と二次葬との間における造墓の時間差という2つの観点から、以下のように類型化し、それぞれの事例がいずれに該当するかを検討する。時間差については、口頭伝承による情報伝達が可能とされる約100年以内と、それ以上に区分する。ただし、上石が確認されない場合であっても、当該期の墓制においては、支石墓の上石を簡略化した標石や、土饅頭のみからなる上部構造の存在が指摘されている(端野2018など)。したがって、上石が存在しない場合には、簡易で永続性の低い上部構造の存在を想定したうえで、以下の検討を進める。

A) -α) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下

先行する墓に上石が存在する場合、上石という明確な標識があり、先行する被葬者に関する記憶が、墓を造営する生者にも継承されていた可能性が高い。また、被葬者同士の生存年代が重複していた可能性も考えられる。

A) -β) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が数100年単位

先行する墓に上石が存在する場合、上石という標識によって墓自体は認識されていた可能性があるものの、その下部に埋葬されている「個人」については、抽象的な認識にとどまっていた可能性が高い。あるいは、「個人の墓」としては認識されていなかった可能性も想定される。

B) -α) 先行する墓に簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下

先行する墓に上石は存在しないものの、塊石、土饅頭、あるいは有機質の標識などが存在していた場合、この程度の埋葬間隔であれば、それらの標識が機能していた可能性が高い。その結果、先行する墓が生者により認識されたうえで、新たな墓が造営された可能性が高いと考えられる。また、先行する被葬者に関する記憶が生者に継承され、被葬者同士の生存年代が重複していた可能性も想定される。

B) -β) 先行する墓に簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が数100年単位

先行する墓の上部構造が簡易なものであった場合、標識としての機能が長期にわたり維持された可能性は低く、先行する墓の破壊は偶発的に生じたものであった可能性が高い。

以下では、これらのタイプのいずれに該当するかを事例ごとに検討し、葬送行為の復元を試みる。なお、以降の検討において大友遺跡の遺構の時間差に関しては、各遺構出土人骨の炭素14年代値を用いる。弥生時代の年代観に関しては、2003年に歴博による炭素14年代論の提示以降その開始時期および時期幅に関し、年代測定結果と型式学的編年を合わせた検討および諸説がみられる（春成他2004；岩永2005：2011；高倉・田中2011；端野2018；宮本2018；藤尾2024など）。本来であれば、本論においてもこれらの年代観に関していずれの立場をとるか示したうえでその時代区分および時期幅に沿って議論を進めるべきである。ただし、①本論ではその妥当性に

ついて紙幅を費やすことが困難であること、②いずれの説に立っても立論可能な時間幅での仮説設定であること、③大友遺跡の人骨群で安定した年代が出ており測定結果の信頼性も高くこれ以降の議論で取り扱うに十分な時期の異なる遺構出土人骨の測定値が得られていること、から墓地変遷に関しては三原氏らが分析を行い（三原他2003）、近年瀧上氏らが較正年代の補正を行った（瀧上他2021）出土人骨の年代測定値（較正年代 2σ の値）を以って墓の造営時期として以下論を進める。なお、今後墓制、特に支石墓下部構造の類例を含めた検討が進み、その時間的な変遷の様相がより具体的になった際には本論で示された可能性をさらに絞り込むことも可能であると考えられる。

①再埋葬 このパターンに該当する事例としては、大友遺跡4次57号支石墓、雀居遺跡1号土壙墓および6号土壙墓が挙げられる。また、5次2号支石墓の棺外人骨群、6次38号甕棺出土A・B人骨についても、同様の可能性が考えられる。

【早期～前期前半段階】本段階の事例としては、大友遺跡4次57号支石墓および5次2号支石墓棺外人骨群が挙げられる。4次57号支石墓については、分析の結果、下部構造である敷石の水平・垂直的な位置関係から、報告者である藤田氏が指摘したとおり、敷石は二次葬であるB号人骨に伴うものであり、同一地点において埋葬が重複した可能性が高いと判断される。加えて、上石から1点のみ外れた支石の存在、および本遺構周辺における同時期の遺構が支石墓に限られることから、57B号人骨の原埋葬には上部に上石を有していた可能性が考えられる。

5次2号支石墓棺外人骨群については、1号甕棺によって攪乱を受けているため、本来どのような埋葬遺構に伴うものであったのかは不明である。ただし、人骨に伴って埋葬施設としての甕棺片が出土していないことから、本棺外出土人骨は、前期前半までに営まれた墓に埋葬、あるいは再埋葬された被葬者であると考えられる。さらに、分析結果から、これら2体が1基の墓に埋葬されていた可能性が高いことが明らかとなった。加えて、大友遺跡の同時期の遺構、および当該期における数少ない人骨出土遺跡である新町遺跡や雀居遺跡においても、複数個体の二次葬のみが埋葬された墓は確認されていない。このことから、棺外出土人骨群の2体は、一次葬個体と二次葬個体の組み合わせであった可能性が高いと推定さ

れる。

時期については、大友遺跡において副葬小壺および人骨の年代測定値から、少なくとも一次葬と二次葬のいずれか、あるいは両方が早期に遡る可能性が指摘できる。一方、大友遺跡では、宮本氏による墓地変遷の検討により、早期段階の墓は5・6次で検出された遺跡南側の支石墓に限られることが示されている（宮本2003）。前期前半段階になると、遺跡北側に新たな墓域が形成され、支石墓が継続して営まれる南側墓域の北縁部には、6次36号墓のように、上石を有さない可能性もある少量の配石のみからなる土壇墓が築造されるようになる。

以上を踏まえると、早期に遡る墓に埋葬されていたと考えられる5次2号支石墓棺外人骨群の被葬者2体のうち、少なくとも1体は、4次57号B人骨と同様に、支石墓に埋葬されていた可能性が高い。さらに、2号支石墓が所在する地点は、早期から前期前半にかけての支石墓群と連続性をもって築造されていることから、当該地点に支石墓以外の墓が造営されていた可能性はきわめて低い。むしろ、棺外人骨群の2体はいずれも、原埋葬が支石墓であったと考えるほうが妥当である。ただし、新町遺跡（志摩町教委1987）や佐賀県久保泉丸山遺跡（佐賀県教委1986）などにみられるように、支石墓と同時期と推定される墓域において、上石が後世に持ち去られた可能性も否定できないものの、上石を有しない墓と上石を有する墓が同時期に混在していた可能性も残される点には留意が必要である。

以上の点から、4次57号支石墓および5次2号支石墓棺外人骨群の葬送行為については、先行する支石墓と同一位置に新たな支石墓を築造し、先行する支石墓の被葬者を合葬した可能性が高いと考えられる。次に、これら支石墓における再埋葬行為について、先行する墓と後続する墓との時間間隔を、人骨の年代測定値を参照しつつ検討する。

早期個体の年代測定値は、2号支石墓1号甕棺外人骨が740-400 BC、3号支石墓が800-470 BC、6号支石墓が810-510 BC、8号支石墓が800-520 BCであり、前期前半個体の年代測定値はSK36号墓で730-390 BCである。これらの数値から、先行する墓と後続する墓との世代差として、短くて数10年程度、長くて400年程度の場合とに区分することが可能である。したがって、上述した類型のうち、

A) -α) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下

A) -β) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が数100年単位

の2類型が該当する可能性が高い。

先行する墓の「被葬者」がどの程度まで認識されていたかは、αの場合とβの場合とで異なると考えられる。しかし、いずれの場合においても、先行する「墓」そのものが認識され、それと新たに埋葬された被葬者との関係性が意識されたうえで行われた造墓行為であったといえる。

【前期中頃～前期末事例】本事例に関しては、6次38号甕棺（前期末）、雀居遺跡1号・6号土壇墓（前期中頃）が挙げられる。

6次38号墓に関しては、大友遺跡の墓地の広がりから、墓の造営の時間間隔について推定可能である。大友遺跡では、上述の通り、支石墓は早期の段階では遺跡の南側に偏って分布しており、前期前半の段階になって、支石墓の北側である36号土壇墓など、支石墓の北側へ墓域が拡大してくることが指摘されている（宮本2003）。したがって、38号甕棺墓周辺に先行する墓が存在していたと仮定しても、遡っても前期前半段階である。

なお、二次葬個体を埋葬していた甕棺片は出土していないことから、38号甕棺に伴う再埋葬人骨は、大友遺跡の中で甕棺を用いる時期、すなわち前期後半に下る可能性は低い。加えて、38号墓は支石墓分布の周縁にあたり、38号甕棺に先行する墓も、位置的に上石を有していない可能性が高い。

ここで、先述の36号土壇墓（730-390 BC）と、38号甕棺と同じ前期末の2号支石墓1号甕棺（370-170 BC）の人骨年代測定値を、38号甕棺から出土した一次葬・二次葬個体の年代に相当する値として参考にするならば、38号甕棺墓と先行する土壇墓との時期差は、短くて数十年程度、長くて560年程度、である。したがって、先ほどの早期から前期前半と同様に、

B) -α) 先行する墓に上石がなく、簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下

B) -β) 先行する墓に上石がなく、簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が数百年単位

の両方の可能性が残される。

雀居遺跡1・6号土壇墓に関してはどうか。雀居遺跡では、土壇墓の段階においては、直接的な時間幅

を示す根拠はないものの、4m四方の狭い空間に11基の墓を繰り返し造営していること、墓壇の長軸を揃える形で墓が配置されていることから、「葬送の場」としての意識を持ちつつ墓が営まれていたことが指摘できる。加えて、先行する墓と切りあいながらも、墓壇の長軸を揃える形で後続する墓が造営されていることから、先行する墓の存在を示す、土饅頭のような何らかの簡易な標識の存在を想定しうる。したがって、雀居遺跡1・6号墓に関しては、

B) -α) 先行する墓に上石がなく、簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下に該当すると考えられる

②再埋葬・再埋置の可能性 このパターンに関しては、大友2号支石墓1号甕棺と棺外人骨、雀居遺跡4・5・7号土壇墓が挙げられる。

まず、上石を有する支石墓であり、先行する墓自体も上石を有していた可能性を考慮すべき大友5次2号支石墓1号甕棺から検討する。本事例に関しても、遺構の立地が早期から前期前半の支石墓が密集するエリアであることから、1号甕棺に先行する埋葬であった棺外人骨群の原埋葬においても、上石を有していた可能性が高い。

ただし、4次57号墓と異なる点は、先行する墓から出土した人骨を「埋葬」する意図性が明確でない点である。2号支石墓1号甕棺棺外人骨は、上甕の底部に近い位置の埋土および下甕掘り下げ時の埋土と、広範囲から出土しており、38号甕棺のように丁寧にまとめられた収骨・再埋葬の様相は呈していなかったと推定される。

棺外人骨群を埋葬していた先行する墓と1号甕棺との時間差について検討すると、棺外出土人骨の少なくとも1体は夜臼式の小壺を副葬しており、炭素14年代も740-400 BCという値が得られている。これに対し、1号甕棺出土人骨は370-170 BCという値が示されている。この夜臼段階の埋葬・被葬者が、1号甕棺埋置段階において一次埋葬であったのか、あるいはすでに二次葬であったのかは不明である。したがって、その両方の可能性について、大友遺跡出土人骨の年代測定値を用いて検討する。

早期の埋葬が、1号甕棺造営によって直接破壊された一次埋葬であった場合、墓の造営の時間差は長くて570年程度、短くて30年程度の開きが生じる。一方、前期前半に築造された墓が早期の墓の被葬者を合葬していた場合には、板付I式の小児棺11号墓に切られており、前期

初頭に比定される36号土壇墓(730-390 BC)の年代を参考にとすると、1号甕棺との造営時期の開きは最大で560年程度、最小で数十年程度となる。

したがって、1号甕棺棺外人骨群の一次埋葬に伴う墓を早期と想定した場合でも、前期前半と想定した場合でも、以下の2通りの可能性が考えられる。

A) -α) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下

A) -β) 先行する墓に上石があり、先行する埋葬との間隔が数百年単位

雀居遺跡4・5・7号土壇墓に関しては、移動されたのは頭蓋骨(4号墓)のみであり、原位置と考えられる7号墓から大きく移動してはいない。ただし、後続する5号墓の被葬者に接しない位置まで移動されている。したがって、5号土壇墓掘削時に7号墓の頭蓋骨を掘り当て、①のように先行する埋葬の全身を掘り起こして収骨するという作業を行わず、頭蓋のみを移動させたといえる。一方で、7号墓の頭蓋骨以外については、ほぼ全身に近い部位が一次葬の状態を保っており、収骨の対象とはなっていない。雀居遺跡全体の墓域形成については上述のとおりであり、先行する墓の位置が認識されていた可能性が高く、先行する7号墓の破壊は偶発的なものではなく、意図された行為であったと考えられる。したがって、本事例は、

B) -α) 先行する墓に上石がなく、簡易な標識があり、先行する埋葬との間隔が100年前後以下に該当すると考えられる。

なお、本事例のように頭蓋骨や膝蓋骨、胸骨など一部を離断して移動させる儀礼としての断体行為も、同時代に存在することが知られている(田中2008bなど)。ただし、その場合、死者の再生阻止という儀礼的性格上、軟部組織腐朽以前に行われた可能性が高い。しかし、4号墓に関しては、7号墓において下顎が原位置を保っていることから、軟部組織の腐朽が進んだ後に頭部が移動されたことが明らかである。加えて、後出する5号墓を造営する際に頭部を掘り当てるような遺構の位置関係にあったことも確認されている。

以上の状況を総合すると、大友2号支石墓1号甕棺と棺外人骨、および雀居遺跡4・5・7号土壇墓のいずれにおいても、先行する墓を認識した意図的な破壊が行われているにもかかわらず、そこから出土した先行被葬者

の遺体の扱いは、①と比較して丁寧さや、収骨が遺体の一部にとどまるという点で簡略化されている。すなわち、大友遺跡においては先行する支石墓という墓制とその立地、雀居遺跡においては埋葬空間の重要性とその場に墓を造営するという規制は重視されているものの、先行する墓の被葬者を改めて再埋葬する、あるいは新たな死者とともに合葬するという意味合いは、①と比較して相対的に低いと考えられる。

③再埋葬・再埋置と遺体離断の判断困難 このパターンに関しては、雀居遺跡3号および9号土壙墓があげられる。3号土壙墓は頭部が腹部付近から出土しているが、4号土壙墓の頭蓋骨の移動例のように下顎骨が原位置に確認できないため骨化後の移動であるという判断ができない。加えて、左上腕骨および左右脛骨・腓骨も遺存していない。部分的な収骨の契機としては後続する墓の造営が考えられるが3号土壙墓に切りあう墓は確認できていない。一方で3号土壙墓出土人骨の保存状態の悪さから細部の出土状況が不明であり、これらの部位が埋葬以前に離断されていた可能性も否定できない。

加えて、9号土壙墓は埋葬後の収骨であればある程度骨化した後の四肢骨のみの集積であるが、下肢骨に関しては左右ともに脛骨と腓骨が接した状態で出土しており、埋葬前の離断後の部位集積の可能性も完全には排除できない。近接した位置に本個体の残りの部位や本個体の原埋葬と推定される墓もみられない。なおかつ、上述の通り3号土壙墓では9号土壙墓で確認されている部位が検出されていない。したがって、3号と9号土壙墓の関連性の有無にかかわらずこれらの墓の二次的な部位の移動が一次埋葬後に行われた行為であるかの弁別は現段階では困難である。

ii) 再埋葬・再埋置行為の社会的意味

今回分析を行った弥生時代早期～前期にみられる墓の切りあいの帰結としての再埋葬行為は、福岡県新町遺跡における収骨再埋葬の検討において、「系譜関係」の確認行為であると位置づけられている(舟橋2024)。加えて、遺跡内における時間的変遷からみると、弥生時代早・前期には北部九州・山口地方において広く採用されていた、「人骨」というより即物的な対象を用いて系譜関係を示す習俗が、北部九州の甕棺墓採用地域でみられるように、系譜関係を強調する際に列状という「墓の空間配置」や

「景観」(溝口1995a; 1995b など)を用いる方向へと移行していく、相対的な儀礼の非即物化の一端を示すものと予測されている(舟橋2024)。北部九州においては、この「列形成指向」が被葬者の個別性よりも全体としての統一的秩序の優先を示すことが指摘されており(溝口2001)、列そのものについては各列内の個体群と異なる列の個体間で血縁関係が推定されており(土肥・田中1988)、列の背後には半族・胞族・氏族などの親族ソダリティーの存在が想定されている(田中2014)。

そこで、本稿で検討した大友遺跡および雀居遺跡における弥生時代早・前期の収骨・再埋葬行為の背景には、いかなる社会的意味があったのかを検討する。

雀居遺跡においては、前項で挙げた①、②の双方が確認されている。これらにみられる、先行する墓の破壊と人骨の収骨再埋葬・再埋置を伴う狭隘な空間への埋葬の反復行為は、埋葬群を形成した人間集団における埋葬空間としての認識と、その規範性の強さを示す可能性がある。新町遺跡19号墓および24号墓で指摘した、人骨を用いた系譜意識の確認行為に相当する可能性がある事例は、1号墓と6号墓の組み合わせのみである。一方、4・5・7号墓については、遺体の一部移動にとどまり、出土状況からは再埋葬という明確な意図性を断定することはできない。したがって、これら遺体の二次的移動行為には、先行する墓が個人として認識されうる場合であっても、個人間の関係性を明確に強調する1・6号墓のような事例と、比較的その強調の度合いが低く、むしろ再埋葬行為が墓の空間配置を順守した結果として生じた副次的現象とも捉えられる4・5・7号墓のような事例とが存在するといえよう。

大友遺跡においては、①、②の双方について、先行する破壊された墓が、 α のように特定人物の墓として認識されていた可能性と、 β のように被葬者に関する情報が抽象化されていた可能性が残される。ここで、大友遺跡において確認される「支石墓」の評価が重要となる。支石墓は、通常の墓とは異なり、出自集団の世代ごとの代表者の墓であり、支石墓群が氏族に対応すると評価されている(宮本2009)。同様に、複数の支石墓群から構成される遺跡を、複数の出自集団分節の集合とみなし、支石墓群の背後に親族集団を想定する見解も提示されている(端野2023)。また、支石墓造営に伴う労働投下量の大きさから、支石墓築造への参加そのものが、集団紐帯

を確認する行為であったとする指摘もみられる（中村2012）。これらを踏まえると、支石墓における再埋葬ないしは埋置行為は、個人間の関係性を再確認する行為というよりも、むしろ縄文時代および弥生時代に散見される「祖霊祭祀」としての多数再葬墓（山田1997；田中2008aなど）に類した、世代を超えた何らかの「集団」のための「祭祀」としての性格が強いと考えられる。ただし、そのなかでも、先行する墓の被葬者を同一墓壇内に、新たな被葬者の遺体に近接させて丁寧に収骨再埋葬している点において、4次57号墓の再埋葬行為は新町遺跡19号墓ときわめて類似している。また、5次2号支石墓1号甕棺外の人骨群も、これに類する事例といえる。38号甕棺についても、特定の墓を明確に意識していたか否かは不明であるものの、先行する遺体についてはほぼ全身を収骨再埋葬しており、総じて先行する遺体を儀礼行為の重要な対象として扱っていたと評価できる。

一方、前期末の5次2号支石墓1号甕棺埋置時における先行墓被葬者の取り扱い、これらとは性格を異にする。1号甕棺は、先行する支石墓と同一地点に造営され、同じ支石墓という墓制を踏襲しているものの、先行被葬者の骨そのものの扱いについては、墓壇内出土ではあるが、再埋葬として明確に認識しうる状況にはない。したがって、大友遺跡5次2号支石墓1号甕棺の事例も、雀居遺跡4・5・7号墓と同様に、先行する被葬者人骨そのものではなく、支石墓という「墓制」の共有、あるいは結果として墓の切りあいにつながった「葬地」の順守を通じて、集団性・統合性を意識、あるいは再確認した行為であった可能性が高い。

以上、例数は少ないものの、弥生時代早・前期における再埋葬・再埋置行為について、人骨の二次的移動行為を復元するという手法からその実態を明らかにし、併せてその社会的意味について検討してきた。雀居遺跡および大友遺跡の双方において、明確な再埋葬行為と、再埋葬と断定しえない再埋葬・再埋置行為が確認された。後者については、葬送行為のなかで先行する遺体に対する重要度が相対的に低下していた可能性が考えられる。これらの事例は、新町遺跡で確認された、人骨を用いた即物的な系譜関係の確認行為から、葬地全体の空間利用や墓制の共有といった、より抽象化された装置へと転換していく明確な時間的差異を直接示すものではない。しかしながら、遺構の時期決定に関する制約によって、その

傾向を十分に捉えられなかった可能性も残されており、弥生時代早・前期という文化・社会規範変容期における葬制規範の揺らぎの様相を示している可能性がある。

6. おわりに

本論では以下の点が明らかになった。

- ①大友遺跡においては、二次的移動個体の扱いに明瞭に埋葬の意図がみられる事例（4次57号支石墓、5次2号支石墓埋土出土人骨群および6次38号甕棺墓）、埋葬意図の有無は不明であるものの二次的移動個体を墓壇内に再埋葬・再埋置した例（5次2号支石墓1号甕棺）が確認された。
- ②特に大友遺跡5次2号支石墓の下部構造に関しては、2度の再埋葬を伴う埋葬であることが確認され、これら先行する埋葬とともに同場所における支石墓であったと考えた。
- ③雀居遺跡に関しては、一次葬個体に二次葬個体を合葬した再埋葬例（1号・6号土壇墓）、再埋葬・再埋置と考えられる二次的移動例（4号・5号・7号土壇墓）、遺体の二次的移動が埋葬後かどうか判断の困難な事例（9号土壇墓）、が確認された。
- ④葬送行為の意味としては、先行する墓の被葬者の収骨再埋葬の意図が確実な事例と、先行する墓の被葬者人骨の収骨・再埋葬に対する重要度が明確な再埋葬よりも相対的に低く空間としての葬地や墓制の踏襲に着眼して新たな墓の造営を行った場合があると考えた。
- ⑤弥生時代早・前期の再埋葬・再埋置行為からみると、人骨を用いた即物的な系譜関係の確認行為から、葬地の全体的な空間利用や墓制の共有など、より抽象化した装置に転換していく様相や葬制規範のゆらぎを示している可能性が考えられた。

謝辞

本研究にあたり、佐賀県文化財課の渡辺芳久氏・土井翔平氏および福岡市埋蔵文化財調査センターの清金良太氏・久住猛雄氏には報告書原図および発掘時の調査写真資料をご提供いただいた。記して感謝申し上げる。大友遺跡の5・6次調査を主導された宮本一夫先生には当時の発掘調査日誌等記録閲覧の許可

を頂くとともに、図面等の保存管理を行っておられる辻田淳一郎先生には閲覧の便宜を図っていただいた。この場を借りて謝意を表す。本稿の一部は原稿執筆終了直後に2026年度九州史学会において骨子の発表を行い、徳島大学の端野晋平氏と宮本先生よりコメントをいただいた。記して感謝を申し上げるとともに頂いたコメントは今後の検討に活かしたい。また、九州大学の考古学および人類学関係の先生方からは日頃より学術的な議論により刺激を頂いている。この場を借りて深謝したい。

本研究のもととなった雀居遺跡および大友遺跡は2025年9月に急逝された中橋孝博先生が人骨の調査取り上げをされた遺跡である。今回の再検討を可能にした調査時の発掘情報を正確に残された先生の知見に改めて敬意を表するとともに衷心より哀悼の意を表したい。

本論考を査読いただいた2名の査読者の方からは様々な視点からの有意義な助言をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

本研究は令和6年度糸島市協定大学等課題解決型事業『新町弥生人の形質・文化・復顔に関する研究』および科学研究費『考古学的方法による先史人類における社会構造の研究』(23H04837 学術変革領域研究(A) 代表: 山田康弘)による研究成果の一部である。

参考文献

- 岩永省三, 2005: 弥生時代開始年代再考: 青銅器年代論から見る。九州大学博物館研究報告, 3. pp1-22.
- 岩永省三, 2011: 弥生時代開始年代再考II: 青銅器年代論から見た。九州大学博物館研究報告, 9. pp9-18.
- 石川健, 2024: 列島先史社会論と民族誌 民族誌的類推の批判的運用をめぐる。すいれん舎, 東京。
- 石川日出志, 1981: 再葬墓。弥生文化の研究, 8. 雄山閣, 東京. pp148-153.
- 大村市教育委員会, 1986: 富の原遺跡群確認調査概報V。大村市教育委員会, 長崎。
- 小澤佳憲, 2009: 北部九州の弥生時代集落と社会。国立歴史民俗博物館研究報告, 149. pp165-195.
- 九州大学医学部解剖学第二講座, 1988: 日本民族・文化の生成2。六興出版, 東京。
- 佐賀県教育庁文化課, 1986: 佐賀県文化財調査報告書84: 久保泉丸山遺跡。佐賀県教育庁文化課, 佐賀。
- 設楽博己, 1993: 縄文時代の再葬。国立歴史民俗博物館研究報告, 49. pp7-46.
- 設楽博己, 2008: 弥生再葬墓と社会。塙書房, 東京。
- 柴尾敏夫, 2019: 焼かれた木棺-北九州市備後守屋舗南側土塁跡の弥生前期木棺墓の検討-。古文化談叢, 83. pp89-104.
- 志摩町教育委員会, 1987: 新町遺跡。志摩町教育委員会, 福岡。
- 高倉洋彰・田中良之編, 2011: AMS年代と考古学。学生社, 東京。
- 高椋浩史, 2024: 土井ヶ浜遺跡1112号墓における集骨葬に関する人類学的研究。東アジア考古学の新たな地平 宮本一夫先生退職記念論文集 上。宮本一夫先生退職記念事業会編. pp319-334.
- 瀧上 舞・坂本 稔・藤尾慎一郎, 2021: 佐賀県唐津市大友遺跡第5・6次調査出土弥生人骨の補正年代について。国立歴史民俗博物館研究報告, 228. pp375-384.
- 武末純一, 2011: 北部九州地域。日本の考古学5 弥生時代上。青木書店, 東京. pp85-145.
- 田中良之, 1995: 古墳時代親族構造の研究。柏書房, 東京。
- 田中良之, 2001: 弥生時代における日韓の埋葬姿勢について。弥生時代における九州・韓半島交流史の研究。九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座編, pp63-71.
- 田中良之, 2002: 弥生人。佐原真編。古代を考える 戦争・金属・稲-弥生-。吉川弘文館, 東京. pp47-76.
- 田中良之, 2008a: 骨が語る古代の家族。吉川弘文館, 東京。
- 田中良之, 2008b: 断体儀礼考。九州と東アジアの考古学 九州大学考古学研究室50周年記念論集。九州大学考古学研究室, 福岡. pp275-294.
- 田中良之, 2014: 弥生時代列状墓と親族組織。高倉洋彰編, 東アジア古文化論叢。中国書店, 福岡, pp56-66.
- 田中良之・土肥直美1988: 二列埋葬墓の婚後居住規定。日本民族・文化の生成2。永井昌文教授退官記念論文集刊行会, 六興出版, 東京. pp397-417.
- 정의도, 김상현, 신가화, 2014: 釜山 加徳島 獐項遺蹟. 한국문화연구원; 부산지방해양항만중 부산항건설사무소, 부산.
- 徐始男, 2004: 靑島貝塚古墳墓群。釜山大学校博物館, 釜山。
- 寺前直人, 2017: 文明に抗した弥生の人びと。吉川弘文館, 東京。
- 栃原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌31補4, pp607-656.
- 中橋孝博, 1988: 古人骨の性判定法。日本民族・文化の生成1。永井昌文教授退官記念論文集刊行会, 六興出版, 東京. pp217-233.
- 中橋孝博, 2001: 大友遺跡第5次発掘調査出土人骨。佐賀県大友遺跡。九州大学考古学研究室, 福岡. pp60-69.
- 中橋孝博, 2003: 大友遺跡6次調査出土人骨。佐賀県大友遺跡II。九州大学考古学研究室, 福岡. pp50-63.
- 中橋孝博, 2005: 日本人の起源: 古人骨からルーツを探る(講談社選書メチエ318)。講談社, 東京。
- 中村大介, 2012: 弥生文化形成と東アジア社会。塙書房, 東京。
- 乘安和二三, 1993: 西日本における弥生人の埋葬姿勢。-土井ヶ浜遺跡出土人骨の上肢型を中心として。潮見浩先生退官記念論文集 考古学論集。潮見浩先生退官記念事業会, 東京。
- 乘安和二三, 2007: 弥生時代における頭部離断埋葬。陶垣, 21. 下関市教育委員会, 山口. pp13-58.
- 乘安和二三, 2014: 埋葬と葬送習俗。土井ヶ浜遺跡。下関市教育委員会・土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム。山口. pp209-240.
- 橋口達也, 1995: 弥生時代の戦い。考古学研究, 42-1, 考古学研究会, 岡山. pp54-77.

- 橋口達也・池辺元明, 1987. 3 第一地点の調査-1) 遺構. 新町遺跡, 志摩町教育委員会, 福岡. pp20-56.
- 端野晋平, 2018: 初期稲作文化と渡来人-そのルーツを探る-. すいれん舎, 東京.
- 端野晋平, 2023: 墓地からみた北部九州初期弥生社会: 埋葬属性間の相関分析と空間分析を中心として. 九州考古学, 98. pp1-22.
- 春成秀爾, 1993: 弥生時代の再葬制. 国立歴史民俗博物館研究報告, 49. pp47-91.
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔, 2004: 弥生時代の実年代-14C年代の測定結果について-. 日本考古学協会第69回総会研究発表要旨. 日本考古学協会, 東京. pp73-76.
- 福岡市教育委員会, 2000: 福岡市埋蔵文化財調査報告書635: 雀居遺跡5』福岡市教育委員会.
- 福永伸也, 2007: 近畿地方における弥生時代開始期の埋葬姿勢. 原始古代埋葬姿勢の比較考古学的研究. 大阪大学大学院文学研究科. pp29-39.
- 藤尾慎一郎, 2024: 弥生人はどこから来たのか. 吉川弘文館, 東京.
- 藤田等, 1981: IV-1 埋葬. 大友遺跡. 呼子町教育委員会, 佐賀. pp180-189.
- 舟橋京子, 2021: 古墳時代横穴墓に見られる改葬行為に関する試論. 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集. 岩永省三先生退職記念事業会編, 福岡. pp335-352.
- 舟橋京子, 2022: 古墳時代の親族関係と儀礼. 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集. 日本考古学協会福岡大会実行委員会, 福岡. pp113-124.
- 舟橋京子, 2024a: 新町遺跡出土人骨に見られる葬送行為の再検討. 東アジア考古学の新たな地平 宮本一夫先生退職記念論文集 上. 宮本一夫先生退職記念事業会編. pp12-27.
- 舟橋京子, 2024b: 出土人骨から見た古墳時代親族と儀礼の変容. 墳墓と祭祀の考古学. pp39-53.
- Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
- 松下孝幸, 1981: 大友遺跡出土の弥生時代人骨. 大友遺跡. 呼子町教育委員会, 佐賀. pp223-253.
- 松下真実・松下孝幸, 2022: 長崎県大村市富の原遺跡出土の弥生人骨. 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要, 17. pp62-73.
- 松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二, 1986: 大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨. 富の原遺跡群確認調査概報V (大村市文化財調査報告第11集), 大村市教育委員会, 長崎. pp30-45.
- 溝口孝司, 1995a: 福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究: いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討. 古文化談叢 34, 古文化研究会, 福岡. pp159-192.
- 溝口孝司, 1995b: 福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究 北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的検討. 日本考古学2, 日本考古学協会, 東京. pp69-94.
- 溝口孝司2001: 弥生時代の社会. 高橋龍三郎編. 村落と社会の考古学. 朝倉書店, pp. 135-160.
- 三原正三・宮本一夫・中村俊夫・小池裕子2003名古屋大学タンデロン加速器質量分析計による大友遺跡出土人骨の14C年代測定. 宮本編. 佐賀県大友遺跡II. 九州大学考古学研究室, 福岡, pp64-69.
- 宮本一夫編, 2001: 佐賀県大友遺跡. 九州大学考古学研究室, 福岡.
- 宮本一夫編, 2003: 佐賀県大友遺跡II. 九州大学考古学研究室, 福岡.
- 宮本一夫, 2003: 大友墓地の変遷. 宮本編. 佐賀県大友遺跡II. 九州大学考古学研究室, 福岡, pp70-85.
- 宮本一夫, 2009: 直接伝播地としての韓半島農耕文化と弥生文化. 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭. 同成社, 東京. pp35-51
- 宮本一夫, 2012: 弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係. 古文化談叢, 67. pp147-176.
- 宮本一夫, 2018: 弥生時代開始期の実年代再論. 考古学雑誌, 100-2. pp1-27.
- 宮本一夫・小沢佳憲・岡田裕之・佐野和美・田尻義之・徳留大輔・端野晋平・西口貴志・能登原孝道, 2001: 遺構と遺物. 宮本一夫編. 佐賀県大友遺跡. 九州大学考古学研究室, 福岡, pp11-41.
- 宮本一夫・岡田裕之・鐘ヶ江賢二・降矢哲男・村野正景・岡崎健治・坂元雄紀・重松辰治・森口信哉・板倉有大・岩永崇史・大串綾・笠置奈美子・木村真理・銀鏡佳・難波里実・西口貴志・能登原孝道・和久田憲吾, 2003: 遺構と遺物. 宮本一夫編. 佐賀県大友遺跡II. 九州大学考古学研究室, 福岡, pp5-40.
- 山田康弘, 1995: 多数合葬例の意義-縄文時代の関東地方を中心に-. 考古学研究, 42-2, pp52-67.
- 山田康弘, 2013. 縄文時代における部分骨合葬. 国立歴史民俗博物館研究報告, 178, 国立歴史民俗博物館, 千葉, pp57-83.
- 山田康弘, 2014: 山陰地方における弥生時代前期の墓地構造. 国立歴史民俗博物館研究報告. 185, pp111-138.
- 山口県教育委員会, 1989: 土井ヶ浜遺跡第11次調査概報. 山口県教育委員会, 山口.
- 呼子町教育委員会, 1981: 大友遺跡, 佐賀.
- 力武卓治2003, 第3章おわりに. 福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告 雀居8 福岡市埋蔵文化財調査報告書747. 福岡市教育委員会, pp222-223.

Received Dec. 19, 2025; accepted Jan. 5, 2026

The social significance of reburial practices in Northern Kyushu at the earlier and early Yayoi Period: Reconstructing secondary relocation of Human remains.

Kyoko FUNAHASHI

Faculty of social and Cultural Studies, The Kyushu University,
Motoooka 744, Nishi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

This study examines mortuary practices, particularly reburial based on secondary relocation of human remains, and their social significance during the earlier and early Yayoi period in northern Kyushu, based on human remains excavation contexts. At the Otomo and Sasai sites analyzed, clear reburials associated with primary burials and reburials/interments with somewhat unclear burial intent were confirmed. Specifically, at the Ōtomo Site, reconstructing burial/reburial practices suggests multiple dolmen constructions occurred at the same location. The reburials observed at both sites indicate that the human bones of the preceding interred individuals held significant meaning in confirming genealogical relationships between graves or interred persons. In contrast, the importance of these bones in reburials/deposits appears to have been relatively lower. These patterns suggest the possibility that they indicate transitional aspects or fluctuations during the transition period at the earlier and early Yayoi period, where mortuary practices shifted from ritual acts using human bones toward a more abstract shared use of burial grounds and burial systems.

Key words: Yayoi period, mortuary practices, human remains, secondary relocation of human remains, reburial